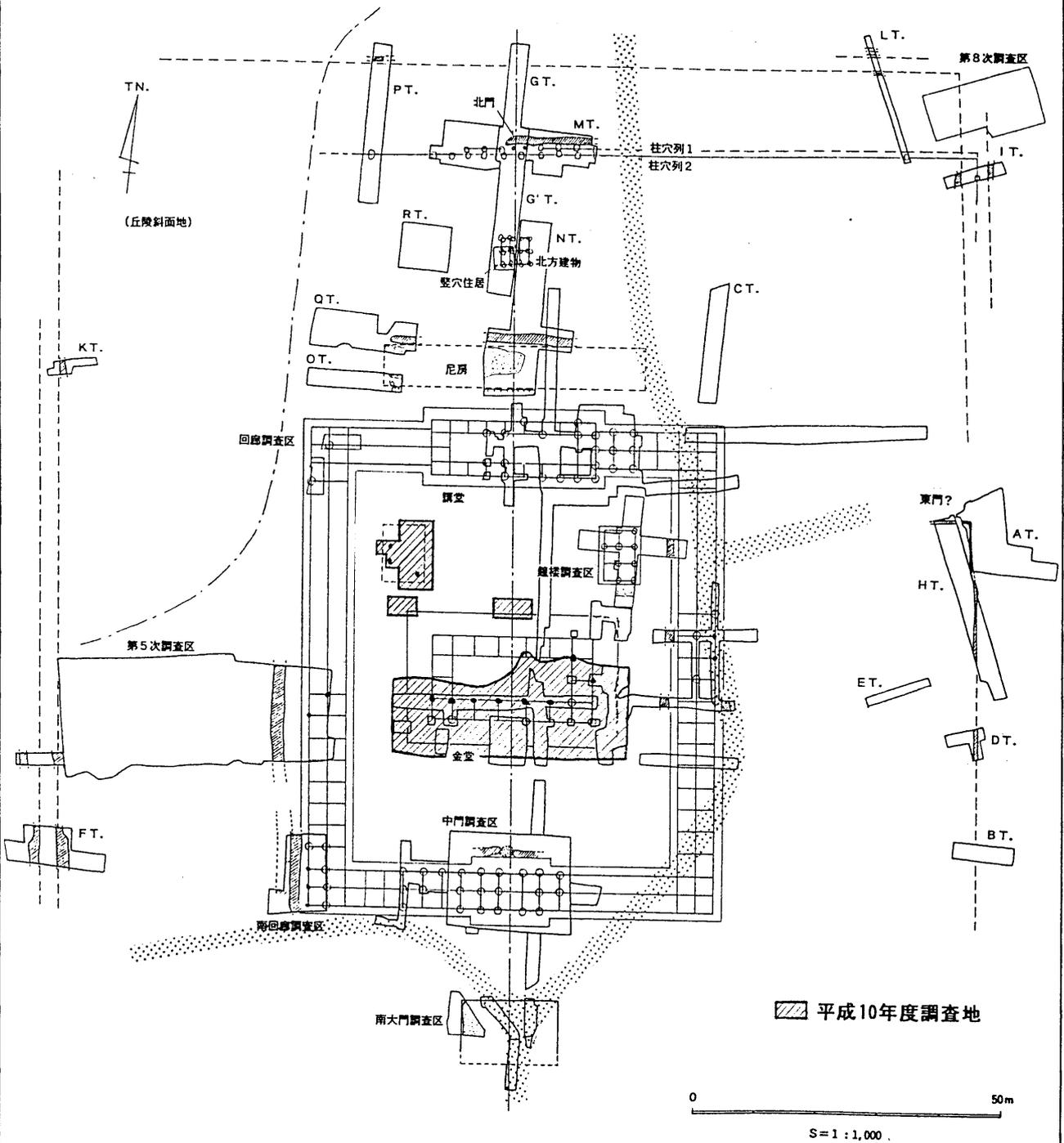


— 平成10年度史跡三河国分尼寺跡確認調査の概要 —



三河国分尼寺跡発掘調査全体図

はじめに

史跡三河国分尼寺跡は、三河国分寺跡とともに大正11年に指定を受けた国史跡です。愛知県教育委員会が昭和42年に実施した発掘調査で、既に中心伽藍の概要は判明していましたが、その後、平成2年度に豊川市教育委員会が寺域の確認調査を実施し、寺域は約150m四方であったことがわかっています。

現在行っている調査は、平成7年度に豊川市が策定した「史跡三河国分尼寺跡保存整備基本計画」に基づくもので、豊川市教育委員会では平成8年度以降、整備に先立つ確認調査を継続して実施してきました。そして昨年度までに、中門跡、南面回廊跡、南大門跡等の調査を実施したほか、寺域北部の遺構確認に努め、講堂跡北側から尼房跡を、その北側から掘立柱建物跡（仮称北方建物）を検出し、更に金堂跡北東側の回廊内に鐘楼（経蔵）跡があることを確認しました。

今年度の調査は、史跡整備のため隣接地に移転が完了し調査が可能となった清光寺旧境内地で実施したもので、現在も土壇として残っている金堂跡を整備手法検討のため全面調査したほか、清光寺庫裏跡地において経蔵（鐘楼）跡確認の調査もあわせて実施しました。

調査主体：豊川市教育委員会

調査目的：史跡整備に先立つ確認調査 調査面積：約550㎡

調査期間：平成10年11月2日～平成11年2月26日

調査成果

1 金堂跡の調査

金堂跡については、昭和42年の調査で建物規模や基壇化粧の概要が既に判明していましたが、今回新たに須弥壇跡が確認されるとともに、北面階段の基礎部分が検出され、階段の規模・構造等が明らかとなりました。

【金堂の規模】

桁行7間（26.4m）、梁行4間（13.8m）の建物で、当時の礎石が計8個、当時のまま基壇の上に残っています。また、基壇規模は東西34.5m、南北21.9mで、乱石積基壇化粧と呼ばれる不整形の石積みによる基壇外面保護がなされています。石積みは、本来基壇南側では高さ約1.6m、基壇北側では高さ0.8mほどあったと推定されますが、現状では最高で45cmくらいしか残っていません。なお、この基壇化粧は全て積み直しが行われているのが判明したほか、基壇の周囲には最大幅1m程度の犬走りめぐるのが確認されました。

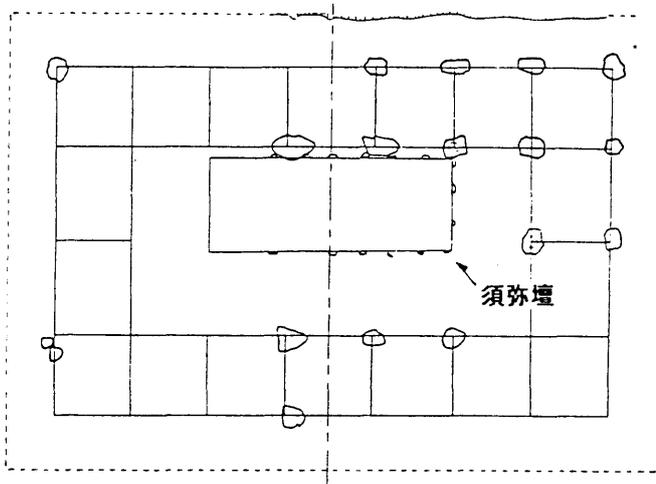
基壇の土は、土を突き固めながら順次積み上げたもので、こうした工法を版築（はんちく）といいます。基壇の土層をよく観察すると、色や土質の違う土が次々と積み上げられ、縞状になっているのがご覧いただけるかと思います。

三河国分尼寺の金堂は、他国の国分尼寺の金堂が、5間×4間規模のものが多いことを考えれば、国分寺の金堂クラスの大規模な建物といえます。やはり7間×4間の飛騨国分尼寺金堂（26.2m×13.1m）とともに、現存する唯一の奈良時代の金堂建物遺構である唐招提寺金堂（28.0m×14.6m）とほぼ同規模の大伽藍であったことがわかります。

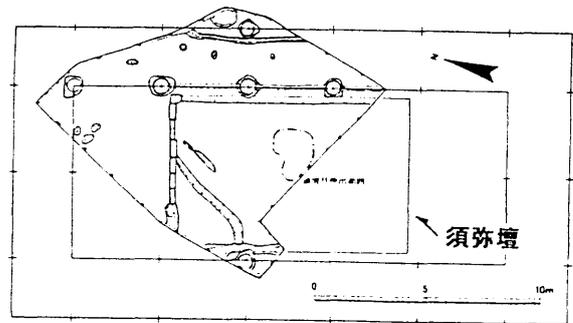
【金堂須弥壇跡】

金堂基壇中央やや北寄りから、幅約12.6m、奥行約4.8m、高さ約15cmの須弥壇跡が検出されました。基壇と同様土を突き固めて築いており、須弥壇上面は、基壇上の床面同様、石敷等の舗装施設のない土間面であったことが確認されました。

国分寺跡や国分尼寺跡の須弥壇調査例としては、他に駿河国分寺跡に比定されている片山廃寺講堂跡（静岡市）の須弥壇調査例がある他、やはり奈良時代の遺構である坂田寺金堂跡（奈良県明日香村）でも須弥壇が検出され、坂田寺の場合、金堂須弥壇下部の堆積層の中から、鏡、玉、銅銭等の鎮壇具（須弥壇の地鎮を行った際埋納した宝物）が発見されています。



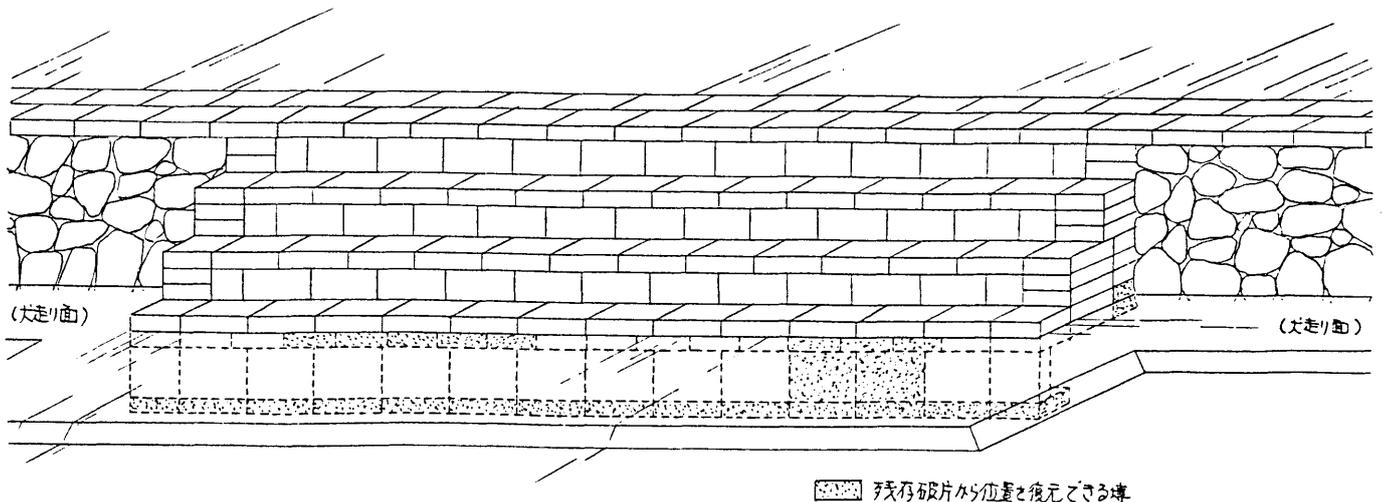
◎参考：片山廃寺講堂跡須弥壇



◎参考：坂田寺金堂跡須弥壇

【金堂北面階段】

金堂南面階段は、後の時代に破壊されたためその規模等を確認できませんでしたが、北面階段は、その基礎部分がかろうじて残っていたため、その規模や構造が明らかとなりました。北面階段は、埴(せん)を用いたいわゆる埴積階段であり、幅は約4mで、基壇上面との関係から図のような3段の階段として復元が可能です。埴積階段の類例には、他に美濃国分寺金堂跡（大垣市）の調査事例等があります。



三河国分尼寺金堂北面階段復元想定図

2 経蔵（鐘楼）跡の調査

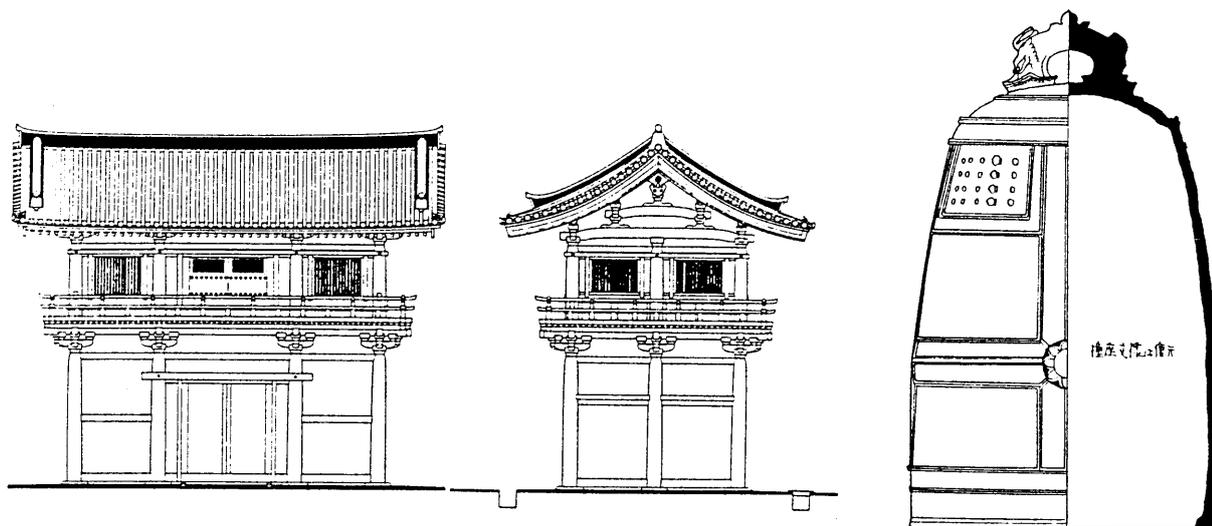
古代寺院では、通常、金堂後方両側の左右対称の位置に鐘楼、経蔵を配置しました。左右どちらを鐘楼あるいは経蔵とするかは決まっていなかったため、文献記録がないと建物の性格を確定しにくい面がありますが、三河国分尼寺の場合、平成9年度の確認調査で金堂北東側から3間×2間の南北棟礎石建物が発見されたため、今回の調査で左右対称の位置に調査区を設けたところ、ほぼ同規模の礎石建物があったことがわかり、この2棟の建物が鐘楼及び経蔵であることが判明しました。

【建物規模】

今回発見されたのは、3間×2間の南北棟礎石建物で、建物内部にも礎石が配置される総柱建物です。礎石3個が元の位置のまま発見され、建物は桁行9.0m、梁行6.0mの規模であることが明らかとなりました。

基壇は、やはり版築によって築かれており、基壇の縁が崩れているため基壇化粧ははっきりしませんが、基壇規模は南北約12m、東西9m前後と推定されます。なお、基壇南東側の一面では、基壇の地覆に埴が用いられているのが確認されました。

昨年度確認した金堂北東側の建物は、後世に礎石が全て抜かれ、根石を確認できただけでしたが、この金堂北西側の建物は保存状態が比較的良好で、より正確な建物規模を把握することが可能となりました。ここは清光寺庫裏の真下にあたり、奈良時代の礎石の約20cm上面に江戸時代の庫裏礎石が配置されているのがご覧いただけるとと思いますが、西側の清光寺本堂跡の下にも、国分尼寺西面回廊の礎石がそのまま残っているかも知れません。



◎参考：法隆寺経蔵立面図

現存する経蔵としては最古の奈良時代の経蔵建物遺構。ちなみに現在の法隆寺鐘楼は平安時代の建造。

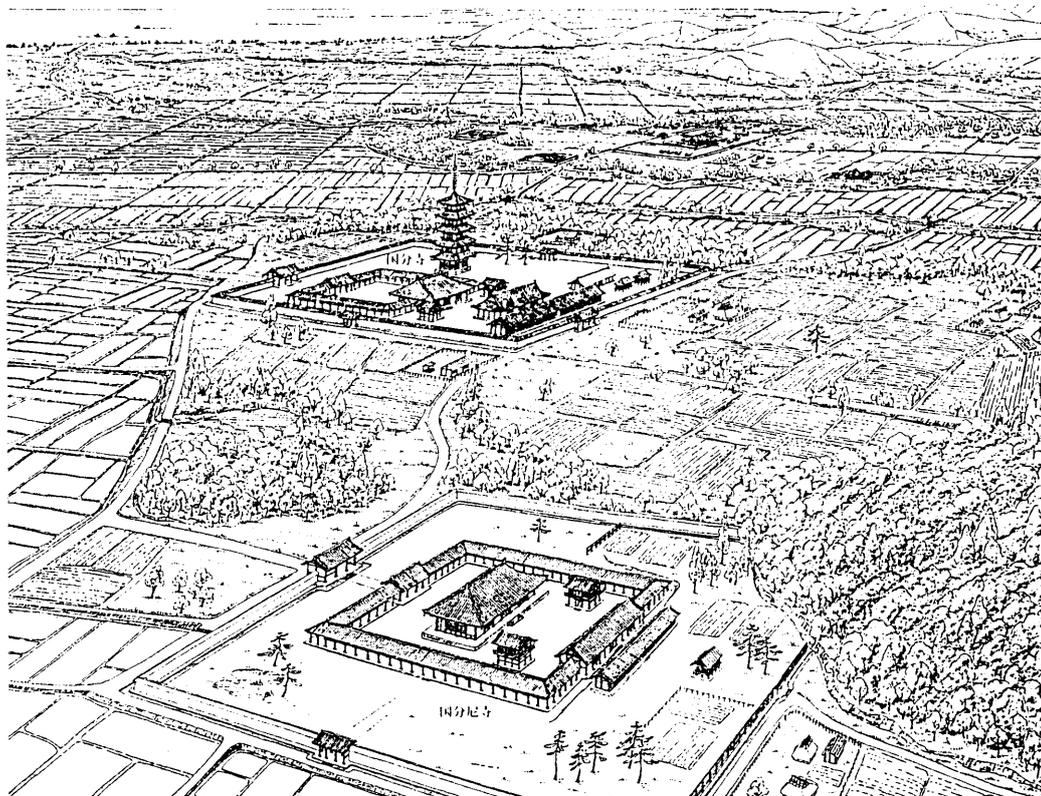
◎国分寺銅鐘実測図(S=1:20)

その作風から平安時代初頭の铸造と推定される重要文化財の銅鐘。現国分寺の鐘楼にかけられています。

おわりに

三河国分尼寺の各伽藍の位置や規模・構造等の把握のため、平成8年度以来実施してきた一連の確認調査により、各遺構の保存状態が予想以上に良好であることが判明し、また史跡整備に向けての基礎データをある程度揃えることができました。

まだ追加調査が必要な箇所も一部にはありますが、平成11年度からはいよいよ史跡整備の造成工事に着手し、数年先には三河国分尼寺が史跡公園として現代に甦る予定です。整備事業では中門及び南面回廊の実物大建物復元の計画もあり、整備事業が完了すれば、はるか天平の昔を偲ばせる朱塗りの門が、皆さんを迎えることになるでしょう。



古代三河国分寺・国分尼寺周辺想像図

(尼寺上空から南西方向を見下ろしたと想定)

【用語解説】

国分尼寺：国分寺とともに、奈良時代に聖武天皇の詔(みことのり)により全国60余国に建立された官立の寺院。正式名称は「法華滅罪之寺」であり、尼10人を置くきまりになっていた。

金堂(こんどう)：古代寺院の中心建物で、本尊仏を安置する建物。国分寺建立の詔(741年)には丈六の釈迦像を祀るとされ、それが国分寺の本尊と考えられているが、国分尼寺については761年に丈六の阿弥陀像を造ることを命じた記録があり、それが尼寺の本尊であった可能性がある。※丈六とは高さ4.8m。ただし坐像と考えれば座高は2.5m程度。

須弥壇(しゅみだん)：仏堂の内部に設けた仏像等を安置する壇。現在の寺院では木造の須弥壇が普通だが、古代寺院では基壇の上に更に土壇を築き須弥壇を造ることが多かった。

塼(せん)：瓦質のレンガ状の焼き物で、古代には基壇化粧や床面舗装などに用いられた。

泥塔(でいとう)：泥土を塔形の中に入れて型ぬきの小塔とし、息災招福等のために仏前に供養納置したもの。平安時代から鎌倉・室町時代にかけて流行した。